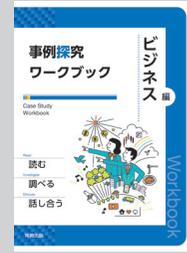




静岡県立富士宮北高等学校
×
事例探究ワークブックビジネス編
活用事例インタビュー

富士宮北高等学校 教諭 大宅 崇



実教：最初に、どのような授業でどのように活用しましたか？

大宅：「3年生の総合実践」で使いました。テーマ順ではなく、総合実践の実習テーマ（旅・観光や商品開発）に沿った内容をピックアップして扱いました。こうすることでビジネス基礎やマーケティングの基礎知識の復習になり、ビジネスについて理解を深めさせています。例えば、旅・観光をテーマとする実習の場合は、事例1「アニメの舞台を巡る旅」、例5「地元の魅力でおもてなし」、事例23「日本一の星空で地域おこし」、事例24「職人の技術と志を感じる観光」を学習してから、地域の新たな観光について調べて考えさせるといった具合です。3年生の総合実践ではなく、1・2年生のビジネス基礎やマーケティングなどで利用する場合はテーマ順にやっても良いと思います。

実教：旅・観光をテーマにした実習とは？

大宅：富士宮や静岡県の観光について、新課程を少し先取りして「高校生が作る地図」を実習課題で作成させました。事例探究ワークブックは、この実習にたどり着くまでのプロセスや思考方法を学習するために使用しました。

実教：事例探究ワークブックを活用した総合実践について教えてください。

大宅：この教材は毎時間活用しているわけではなく、座学（1コマ）、実習（2コマ）合計3単位の総合実践の内、**座学（1コマ）で利用**しています。ビジネスにおいて必要となる文書（見積書や納品書など）作成などの実務的な総合実践だけに

なってしまうと、本校の生徒はビジネスに対して**面白みを感じない**と思いました。そこで、事例探究ワークブックを使い、より具体的で自分たちの身近な話題をもとにした総合実践を行うことにしました。事例探究ワークブックを利用した総合実践では、1・2年次のビジネス基礎やマーケティング、3年次に履修中の商品開発を実践することを目的としています。1・2年次は学習内容の習得に重きを置いている分、その学習内容が世の中でどのように活かされているかまでは深められていません。しかし、卒業までにはこれらの学びを修めて社会に出てほしいです。

実教：総合実践を改善しようとした経緯と、なぜこの教材を使おうと思ったのか、もう少しお話を聞かせてください。（他にも様々な総合実践用の教材がそろっていると思うのですが…。）

大宅：これまでの総合実践は、**見積書や納品書の書き方**を教えるなどの、企業実務の細かい手続き業務を学ぶものでした。しかし、現在、実務においては**ほとんどの処理が電子化**されており、むしろ社会ではビジネスの仕組み、商品・サービスの開発～販促・提供までがどのような意図・流れで行われているかを理解し、自分たちのアイデアや考えを表現できる人材が求められています。このような人材を育成するために総合実践の内容も改善しようとした際に、事例探究ワークブックのテーマや構成は最適でした。決め手は、身近で面白い事例や、写真・絵がたくさん掲載され、生徒が興味・関心を持ちやすく、アイデアや考えを引き出すことができるところです。また、複数教

員が担当する授業で毎回事例を先生側で用意して授業を行うことは、準備や打ち合わせといった負担があり、現実的に難しいと感じたことも導入を決めた理由の一つです。さらに、値段がリーズナブルだった点も魅力的でした。

実教：たしかに見積書などは企業実務ではほぼすべて電子化されているので、世の中に対応するためにも自然な改善だと思います。

大宅：もちろん従来の総合実践で実務の流れを生徒が理解することは有意義ではあると思いますが、これからの時代により必要なものがあると感じています。**Society5.0**の時代が来るといわれていますが、**Society5.0**で求められる力として、①文章や情報を正確に読み解き、対話する力、②科学的に思考・吟味し活用する力、③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探究力と表現されています。事例探究ワークブックは、この求められている力を身に付けるための教材だと思いました。事例を読み、その関連する情報についてさらに深く調べ、互いに意見を述べる機会を与えることで生徒は成長できると思います。加えて新課程の商業科でも大きなテーマとなっている「地域活性化」や「新しいビジネスの発見」にもつながると思います。

実教：新課程を見据えた意図も多少はあったのですかね？

大宅：当然です。これまでのように覚えて書くという学習ではなく、調べて考えて新しい価値を見つけたという点に主眼を置きました。

実教：「地域活性化」などは地域の实情にあわせて先生方で**独自の教材**がありそうですが…。

大宅：これらに向けて先生がオリジナルの教材を作成しても良いとは思いますが、そうすると**学校としての継続性に難しさ**を感じます。どうしても属人的な授業になってしまう傾向があります。しかし、この教材を軸にすることで、初任の先生やこの分野に関わってこなかった先生方でも授業の

質を保つことが可能で、継続性を担保できると思っています。

実教：これまでの指導をガラッと変えたわけですが、当然、授業も変化したと思います。具体的に**どのような授業形式**でしたか？

大宅：1コマ分の座学では、調べ学習・グループワーク・発表を行います。形式は、4人1組のグループを作り、事例探究ワークブックのテーマを読み、調べ、ワークをグループで行い、その内容を発表するという流れです。(その後の実習2コマ分では事例探究ワークブックを使用していないので割愛します。)

実教：グループ設定はどのようにしましたか？

大宅：グループの設定は、単元の最初にExcelの座席表へ**ランダム関数**を組み、無作為に決められました。その際、各生徒の役割もランダムに決まります。グループの構成や役割を生徒たちに任せると、その分野が得意な生徒の意見のみ反映されたり、仲よし同士のグループが形成されて学びが薄まったりするからです。自分が苦手意識のある生徒ともチームを組むことで、卒業後、様々な環境・相手と仕事をする準備や経験にもなると思います。

実教：生徒たちの役割や、授業の様子について詳しくお聞かせください。

大宅：役割は、進行、記録、発表としました。進行役はそのグループの意見をまとめ、記録役は議事録をとり、意見がまとまった流れを記録します。発表役は、グループの考えを1分程度で発表します。最初はランダムで決まる役割に戸惑っていましたが、2、3回で慣れていました。自分たちの考えを発表する必要があるため、積極的な話し合いがされていました。

実教：授業の様子がとてもクリアにイメージできました。一方、**評価について**もお話を聞きたいのですが、提出物の評価方法や、どのような提出物

だったかも知れませんが教えてください。

大宅：各生徒が記入した事例探究ワークブック、記録役が残した議事録、発表の内容を評価対象にしました。まず、事例探究ワークブックへの記入は個人の評価のみとしました。事例探究ワークブックの設問・記入欄だと、グループワークの過程で、他の生徒の考えを自分の考えとして事例探究ワークブックに写してしまい、せっかく良い考えが書かれていても誰の考えかわからなくなります。そこで記入欄を分け、自分の考えと他の生徒の考えでよかったところをそれぞれ別々に記入させることで、生徒自身がどのような考えを持ったか、他の生徒の意見をもとにどのように考えが改善されてきたか、良い考えはどの生徒が最初に出したのかを特定できるように工夫して評価しました。

実教：とても参考になる工夫ですね。議事録や発表内容についてはどのように評価しましたか？

大宅：本来の評価は、新学習指導要領解説でも「観察」（見とる）することが求められています。しかし40人いる教室では、すべての学習状況をリアルタイムで観察することが現実的に難しいため、「議事録」での評価に切り替えました。議事録があることで、そのグループの考えを導き出した生徒を特定できたり、議論のプロセスを観察できたりするので、評価には重宝しました。発表は発表役の発表内容、発表の仕方（声・態度）をもとに、グループの評価としました。

実教：様々な工夫を経て、この評価方法にたどり着いたんですね。

大宅：授業を始めた当初はグループ分けから悩みました。生徒は仲良し同士で集まろうとするのですが、それだと新しいアイデアや学びにつながらないと感じたからこそ、途中でランダムなグループ分けに修正しました。観察についても、40人を先生1人でリアルタイムに観察するのは不可能だと感じたため、議事録で観察することにしました。もちろん、振り返りでも評価しました。

実教：授業から評価に至るまでわかりやすいご説明でした。授業で事例探究ワークブックを活用してみて、先生の手ごたえや生徒の反応などは、振り返ってみていかがですか？

大宅：生徒の反応は概ね良かったです。特に、掲載されている身近な事例やテーマによって、生徒が世の中のビジネスに親近感を持ち、学習に対して意欲的になったと感じました。まずは生徒たちが興味を持つことが大切だと感じました。

実教：特に反応の良かった事例はありますか？

大宅：本校が富士宮にあるということもあり、観光に関する内容を扱うOMO（事例5「地元の魅力でおもてなし」）は良かったと思います。富士宮といえば、世間的には「富士山観光」や「やきそば」をイメージされると思いますが、地元の生徒たちにとって富士宮は生活の場であり、観光地ではないため、何が観光資源かを理解していません。事例5のOMOやオーセンティシティ（本物感・真正性）などの学習を通じて、地域の魅力を発見させる授業は印象深かったです。地元の人しか行かない飲食店を調べてみたり、観光ガイドやインターネットの検索にひっかからない地元の人しか知らないような小さな滝を調べたりすることで、地域の魅力を発見させました。

実教：自分が住んでいる地域の魅力や観光資源は知らないことが多いですね。他の事例はいかがでしたか？

大宅：身近なポッキーと午後の紅茶のような企業のコラボ（事例9「コラボレーションして商品を開発する」）については、興味を持った生徒が多かったです。自分たちが知っているものや持っているものの学習は楽しいようです。企業間のコラボについてはグループごとに考えさせました。やきそばやアイスなどと様々な企業の商品をコラボし、新商品のアイデアを考え、発表していました。

実教：生徒も前向きに学習してくれたようでうれ

しいです。**生徒の変化**について、何かお気づきになった点はありますか？

大宅：まず1点目は**積極的な発言が増えてきた**と思います。事例やワークをもとに基礎的な理解を行い、そのあとに、自分の考えをグループ内で発表する。進行役が中心となり、グループの考えをまとめ、発表役が発表する。それぞれが考えを発言しないとグループの発表ができませんので、積極的に生徒たちは活動していたと思います。もともと本校の商業科は活発な生徒が多いのですが、中には大人しい生徒もいます。そんな生徒たちも積極的に発言できるようになりました。3年生は就職や進学がかかる時期なので良かったと思います。

実教：なるほど。もう1点の変化はいかがですか？

大宅：2点目は**表現力の向上**です。自分の考えやグループの考えを表現することができるようになったからだと思いますが、昨年度はじめて**全国高等学校ビジネスアイデア甲子園で学校賞**を受賞しました。教科書に載っていない内容を自分たちで考え、お互いに表現し合うようになったからこそ、これまでよりも積極的に考えを書いたり、絵を丁寧に描いたりするようになったことが関係していると思います。加えて、グループをランダムにしたことにより、あまり関わっていなかった生徒同士でも自分の考えを示す必要があり、表現力が向上したと思います。

実教：これだけの授業をされるとなると**授業準備や教材作成は大変ではなかった**ですか？

大宅：毎回、先生が自分で事例を探して準備することは負担が大きいのです。しかし、事例探究ワークブックには、様々な事例があり、文章・写真もあるので、先生側の負担は少なかったです。生徒たちもスムーズに学習できていました。

実教：この教材があるだけでも負担が少ないというご評価はうれしいです。

大宅：教材作成に関しては、教科書と異なり、一

般的にこのような教材には指導資料がついておらず、負担を感じることがあります。しかし、事例探究ワークブックには**実教出版のWebサイト**に、「**指導計画案**」「**議事録**」「**振り返りシート**」「**授業展開スライド**」「**ワークシート**」「**観察シート**」「**観点別評価表**」「**ルーブリック評価表**」があり、それらを利用することができたので、教材作成や授業準備の負担はさほど感じませんでした。特に、「**指導計画案**」では指導の流れを知ることができ、参考になるとともに、その内容をアレンジして授業を行っていました。「**議事録**」は、単元ごとに記録役に配り、記録させました。生徒たちは協力しながら丁寧に記録を取っていました。また、当時は旧課程でしたが新課程を見据えて、「**ルーブリック評価表**」は新課程で始まる評価の3観点をどの様に評価するか参考にしました。このように事例一つずつに様々なサポートツールが用意されている点は、授業する身としてはありがたいです。

実教：特に参考になったとおっしゃる**指導計画案**は、具体的にどのように使いましたか？記憶に残っている資料や発問例などもあわせて教えてください。

大宅：授業を組み立てるときの参考資料にしました。例えば、発問のタイミングや、生徒に調べ学習をさせる方法や調査項目、生徒への聞き方などを参考にしました。特に印象深いものは、事例1「**アニメの舞台を巡る旅**」です。まず、導入ではイラストをみて「**アニメの中のシーンと実在の舞台が結びつきますか**」「**また、そこにいったことがありますか**」という質問例があります。近隣の沼津市を舞台とした**ラブライブ！サンシャイン!!**というアニメや、本校で映画撮影（**広瀬すず**さんや**山崎賢人**さんが出演）があったことを知っている生徒もいて、この授業と日常生活が関連していることを印象付けることができました。また、展開において、「**自分が観光客ならどのようなサービスがあったら嬉しいだろうか**？」「**地元の人にとっても嬉しいことはないだろうか**？」といった質問により、生徒が考える機会を持つこと

ができました。1回目の授業で、生徒はこの授業は楽しいと感じさせるきっかけとなったと思います。授業において、発問は自分で準備しますが、このような質問例は参考になりました。また、指導計画案には順番に関わらず、事例5、23、24に関連する内容を続けることで理解を深めやすいとあったため、私も事例の順番どおりではなく、関連する内容をやっていくことにしました。指導計画案には解答例とともに検索のヒントもあり、指導書の要素もあったと思います。

実教：この教材に掲載している QR コンテンツについてはいかがでしたか？

大宅：一人一台端末時代には欠かせないと思います。種子島の聖地巡礼など特に重要なものは授業中に各自で見えるようにしました。生徒は興味深そうにみていました。また、時間の関係で授業中に見られなかったものは、授業後に家で「参考までに見ておくと良いよ」といっていました。これから入学する生徒は一人一台端末をもっているのです。授業中により活用する機会が増えてくると思います。ただ、空飛ぶレジ袋など、どのように扱って良いか分からなかったコンテンツもあるので、授業で扱う場合は先生側で事前のチェックが必要です。渋谷 PARCO の事例は、WEB サイトを見せて説明もしたのですが、本校の生徒はイメージできないようで、あまり、反応がありませんでした。富士宮の生徒には先進的すぎたようです（笑）。事例はたくさんあるので、その学校にあった事例を取り上げるとよいと思いました。

実教：編修担当者が一生懸命用意した甲斐がありました。最後にこの教材の活用について、今後に向けたお考えはありますか？

大宅：本校に限った話ではないのですが、今年度の入学生から一人一台端末を導入されている学校も多いかと思います。実教出版の Web サイトには配信可能なワークシートがあるため、ICT 教育との親和性が高いです。Google Classroom やロイノートなどでこれらのワークシートを活用す

ると、課題の提出・評価をペーパーレスで効率的に行えるだけではなく、指導と評価の一体化にもつながると思います。評価した後、評価の低かった生徒を自分たちが求めているレベルまで引き上げるといふ指導と評価の一体化は、前述のペーパーレスによる効率化で生まれた時間・余裕を活用することで実現できるのではないかと考えています。また、今後はロイノートのシンキングツールを使うなど、意見や考えの出し方を研究していこうと思います。